

受験番号	
氏名	



2026年度 東京未来大学入学者選抜試験
一般選抜[筆記試験型] A日程(1月24日実施)

国語



【注意事項】

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験時間は1科目60分です。
- 3 原則として、途中退出は認められません。試験中に気分が悪くなった人や、トイレに行きたくなった人は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答は、シャープペンシル又は鉛筆で記入してください。
- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 「やめ」の合図があったら速やかに筆記用具を机上に置いてください。
- 8 試験終了後、問題冊子、答案用紙はすべて回収します。
- 9 その他、必ず監督者の指示に従ってください。

I 現代文 一般選抜「筆記試験型」 A日程(1月24日実施)

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

かつて日本でもよく引用されたドイツの詩人カール・ブッセの「山のあなたの空遠く」という言葉ではじまる詩がありますが、どこか山の向こうに未知の世界があり、それが自分たちの世界とまったく違ったユートピアのようなどころだという意識は、世界のどこに行ってもあるようです。「桃源郷」や「蓬莱山」、「地上の楽園」など、人間の理想の^②トウエイとしての異世界については、神話や伝説などが、いろいろなところで語り伝えていきます。

実際、山のあなたへ行つてその現実を見ると、そこはユートピアでも楽園でもなくて、逆に地獄だったなどということもあるのかも知れないのですが、といって日常の世界は平凡で面白くない。となると、人間には「異世界」に対する憧れがどうしても出てきます。それは人間にとっての本源的な衝動の一つとしてあるとしか思えないようにも感じられます。そうした衝動はおそらく、異文化について考えるときにも発動します。異文化に対する憧れは、自分の日頃接するものとは違ったものへの関心であり、自分たちの文化にはないものをよそに見出そうとする、ないものねだりでもあるのでしようが、私にはそうした異文化への関心こそ人類にとっての基本的な関心であり物事を発展させる重要な動機の一つであるように思えてなりません。

人類学では、人間社会の発展は、「族内婚」、(①)同じ一族の中で結婚を繰り返していた状態から、「族外婚」、よその集団の人たちと婚姻をするようになって初めて人間の集団が大きくなった。外へ向かっていったことから社会集団の発展が起ったと一般に考えられています。(Ⅰ)によって今日の社会への発展の基礎ができたと言っているのですが、その他の面においても何か違ったものを取り入れることによって自分たちの生活がより豊かになるという「智慧」は、人類にかなり共通してあるように思います。

(②)、それが人間と社会の古代から現代まで依然として変わらない異文化への大きな関心の源なのでしょう。また、異文化を理解するうえで、改めてそういう人間の生活の基礎になるような異文化への関心をいま一度見直す必要があると思います。

異世界・異文化への憧れは、人間社会の発展のために必要な変革にとっての原動力となることがあります。その端的な例は、日本の近代です。

たとえば、「黒船到来」以降、日本人は、西欧やアメリカなど科学技術の発展した先進社会に対し、追いつけ追い越せと「文明開化」を行なってきましたが、同時に西欧やアメリカに対して、異文化としての憧れを持って、その憧れを実現するために近代化を行なった

側面があります。欧・米がもし憧れに値するような世界でなく、単に軍事力などが強いだけであれば、日本の近代化は別の形をとったかもしれません。ましてや、現在でもなお何かあると欧・米の例を挙げずにはいけないような、「アメリカや西欧に対する限らない接近」という衝動は日本人の間に生み出されなかったのではないかと思われます。

日本の近代化は、単に技術的な側面での「Ⅱ」で対すればよいというわけではなかったと思います。全面的な「西欧化」ではないという「Ⅱ」的な「自立」のスローガンは必要でありましたが、実のところ近代日本にとっての西欧文化は、現在に至るまで強い憧れの対象となり続けてきました。その西欧文化への憧れは未だに非常に強いものがあって、今でも何かというところパリやロンドン（そしてニューヨークやロサンゼルス）に行こうとしますし、日本がこれだけいろいろな機械製品を製造するようになり、現代国家としては互角か互角以上の経済力を持っても、たとえば雑誌は依然として毎週毎月のように、パリ、ロンドン、ウィーン、ニューヨークなどの特集を組み欧・米の文化への憧れを人々に伝達しています。こうした憧れの強さ、深さが、日本の近代化の一つの原動力だったと思うのです。そういうものがなくて果たして日本の急速な近代化が可能だったかどうか。私は、非常に難しいところだと思っています。

近代日本にとっての西欧は、科学技術的にも社会としても非常に発達した社会であり、「文明」のモデル足り得る存在でした。またその文化も、哲学や文学、音楽から建築に至るまですべて日本人が憧れることができ、理想として追求したくなるようなものでした。自分の世界でそれと同じものを作ることは出来ないとしても、理想として追求しようとしたことは事実です。また西欧クラシック音楽とそのオーケストラに、歌手にオペラに、西洋美術展にと、音楽や美術や文学などでは限りなく西欧に近いスタイルがそのまま輸入されることにもなっています。多くの面で西欧の文化は日本人の学習の対象になりました。それが日本の近代化、現代化の原動力になったわけですから、「異文化に対する憧れ」が果たした役割は非常に大きいと言わなければならないでしょう。

では逆に近代以前は別として近代の発達した西欧から見て、非西欧世界の異文化はどう感じられていたのでしょうか。そこにもやはり異文化への憧れがありました。

（③）ルソーには、「高貴な未開人」という有名な言葉があります。これはルソーが生きた時代のヨーロッパを、「科学技術、文明として発達しているが、人間の心が純粹さを失い、汚れ、高貴な人間性が失われてしまった社会」と断じ、それに対して、当時断片的な知識として入ってきていた南太平洋の島々に住む人々の世界を、「人間性が非常に純粹に保たれて、西欧のような汚濁した世界ではなく、その住民は未開人であるが高貴な未開人である社会」と捉えて、「その点こそ西欧に欠けているものである」と称揚する文脈の中で語られた言葉でした。いずれにしても、そこには、南方の異世界に自分たちが失ったものをまだ保持しているユートピアを見つけたいという衝動と同時に、異文化に対する憧れが感じられます。

西欧やアメリカの人々が以上のように自文化を批判的に捉え、その一方で何らかの異文化に憧れを抱くに至ったのは、もちろん文化

人類学者だけではなく、旅行家などを含めて西欧人が徐々に非西欧世界を「発見」していった、その文化のあり方を深く知るようになり、そこに西欧とは違った価値とか違った美と芸術、違った人間関係のあり方や別の形の社会「チツジヨ」、自然との調和的關係などを見出したからでした。それらの内容が示すものは西欧世界にとって文化的に非常に大きな「ユウワク」であり、憧れとなるものでした。タヒチへ行ったゴーギャンや、日本へ来たラフカディオ・ハーン（小泉八雲）など、非西欧世界の魅力にとらわれてはるる南太平洋や極東へ出かけて行き、そこに住み着いた人も多く存在しました。そしてそこまではしないまでも、アジアやオセアニアの異文化に憧れた西欧人の例は数多くあります。

ですから、工業的に発展しているからその文化が素晴らしいかという点と必ずしもそうではなくて、「未開」状態にあるとか、科学技術や工業的な面ではまだ発達段階にあるような文化であっても、逆にその「未開」さや発達段階にある「よさ」を見つけ出し、自分たち西欧には存在しない美や価値の世界として憧れることもあるわけです。その場合も一種の「ないものねだり」と言っている面があると思いますが、人間には他人の家の食事がおいしそうに見えるということと同じように、他の文化は非常に優れたものに見える傾向もあるということではないでしょうか。

（青木保『異文化理解』岩波書店より 一部改変）

□ 文章中の（ア）・（イ）・（ウ）のカタカナを漢字に直しなさい。なお、漢字は楷書で丁寧書きなさい。

ア トウエイ イ チツジヨ ウ ユウワク

□ 文章中の①・②・③に入る最も適当な言葉を、それぞれについて次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア	しかし	イ	たとえば	ウ	まるで	エ	すなわち
オ	ところで	カ	おそらく	キ	あるいは	ク	それとも

〔三〕 文章中の（Ⅰ）に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、漢字三文字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

〔四〕 文章中の（Ⅱ）に入る最も適当な言葉を、次の三つの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 和光同塵 イ 和洋折衷 ウ 和魂洋才

〔五〕 この文章は、次のア・ウの三つの小見出しに分けて書かれている。それぞれの小見出しで書かれた部分の最初の五文字を答えなさい。（句読点や記号がある場合は、それも一文字とする。）

ア 「異世界」への憧れ
イ 発展・変革の原動力
ウ 欧米にもあった異文化への憧れ

〔六〕 A「こうした憧れの強さ、深さ」を示す例を、Aと同じ段落の中から二つ探し、それぞれ二〇字以上三〇字以内に自分でまとめて、「……こと」につながる書き方で答えなさい。（句読点や記号も一文字とする。）

Ⅱ

言語事項・文学史 一般選抜〔筆記試験型〕 A日程（1月24日実施）

一

次の①～⑤の傍線部分の漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。なお、ひらがなは丁寧に書きなさい。

- ① 因縁を感じる。
- ② 巨大な駟逐艦。
- ③ 造詣が深い。
- ④ 気障な仕草。
- ⑤ 人を唆す。

二

次の①～⑤の四字熟語の空欄に入る適当な漢字一字を答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

- ① 物事の順序や立場などが逆になること 「主（ ）転倒」
- ② 広く果ての無いこと 「廣大無（ ）」
- ③ 宇宙に存在するありとあらゆるものの全てのこと 「（ ）羅万象」
- ④ 離れたり集まったりすること 「離合集（ ）」
- ⑤ 実行するにはまだ早すぎることに 「時期（ ）早」

三

次の①～③の問いに答えなさい。

① 次のア～カから、中原中也の作品を二つ選んで、記号で答えなさい。

ア	山羊の歌	イ	第百階級	ウ	月に吠える
エ	智恵子抄	オ	測量船	カ	在りし日の歌

② 次のア～カから、夏目漱石の作品ではないものを二つ選んで、記号で答えなさい。

ア	明暗	イ	草枕	ウ	友情
エ	それから	オ	細雪	カ	虞美人草

③ 次のア～カから、『蟹工船』の作者を一人選んで、記号で答えなさい。

ア	伊藤整	イ	井伏鱒二	ウ	堀辰雄
エ	小林多喜二	オ	菊池寛	カ	中島敦

Ⅲ 現代文 一般選抜「筆記試験型」 A日程（1月24日実施）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

生命の本質は、それを構成する物質やその姿かたちにあるわけではない。構成する物質や形は、時間とともに、環境に合わせて絶えず流転していく。

では、生命の本質はどこにあるのだろうか。

生命の本質はその（Ⅰ）にこそあると、僕は思っている。

時間や環境によって物質は変わっても、それが果たす生命固有の機能には変化はない。動力や材質が変わっても、車という機能は不変であり、僕らが車と呼ぶそのものの本質は、人を乗せて運ぶというその機能にあるのと同様である。

僕の好きな漫画に、手塚治虫の『火の鳥』がある。

『火の鳥』シリーズのなかでも異彩を放つ「望郷編」では、地球から遠くの惑星へ移り住むことを^アヨギなくされた主人公ロミが、故郷である地球を想い、地球へと帰ろうとするのがクライマックスである。現地で生まれた自分の子孫の一人とともに、宇宙船に乗り込んで、はるか彼方の地球へ向かう。その途中にいくつかの惑星に立ち寄る。

その一つに地球と見かけ上よく似た惑星がある。しかし、そこでは地球上では無機物である岩石が意思をもち、互いに協力して動き、狩りをしているという異様な世界が広がる。岩石たちに襲われそうになったロミたちは、惑星を急いで離れる。この惑星では鉱物が主導権を握っているのだ、とつぶやきながら。

岩石から生命が誕生できるかはさておき、この話は端的に、僕らは物質ではなく、生命固有の機能をもって、そのものを生命と認識していることを示す。

生命に固有の機能とは、「自己と外界との隔離」「自己複製」「自己の維持」に他ならない。より一般的に「生命活動」といいかえてもよい。生命は、ある一定の環境に置かれたとき、生命活動をしつづけることができる。周囲から水や空気や食べ物を体内に取り入れたり、逆に不要物を排出したり、運動をしたり、増殖したり、あるいは思考したりという活動を続けることができる。

僕らは、物質がそのような振る舞いをするときに、それが「生きている生命である」と認識する。目の前の石ころが突然動きだし、別の石ころを食べだし、増殖したとすれば、僕らはそれを生命だと感じるだろう。

反対に、生命でない物質が、同じように一定の環境に置かれたとしよう。非生命であるその物質は、最初は何かしらの運動をしているかもしれないが、その運動はいずれ止んでしまう。

もっていた運動エネルギーは、周囲の空気や水などの「マサツ」によって失われる。河原で投げた小石の運動がすぐに止まってしまふように、何も起きない状態——^A熱力学平衡と呼ばれる安定な状態にいつかは達する。

運動だけではない。生命が宿らない物質は、徐々に安定な別の物質へと変化していく。たとえば、空気中に置かれた鉄が徐々に錆びていくように、ゆっくりと、しかし確実に、安定な物質へと変化していく。安定な物質は自力で元に戻ることはない。^aは盆に返らないし、錆びた鉄は勝手に金属に戻ることはない。熱力学平衡とは、自力で動けない、変わらない、死の状態といつてよい。

一方、生命をつくる物質も、安定な物質——熱力学平衡状態へと、ゆっくりではあるが同様に変化しようとする。安定な物質は、安定であるがゆえにこれ以上変化することができない。つまり、機能をもつことができない。したがって、機能をもつ物質が安定な物質に代わり、元に戻らなければ、生命活動を正しく継続できず、やがて生命は死に至る。

つまり、生命が生きている状態を保つためには、熱力学平衡から常に免れ続けなくてはならない。では、生命はいかにしてそれを成し^ウトげているのか。

生命は、自分の体をつくる物質が安定な別の物質になる前に、これらを自ら分解し、周辺の環境にある物質とエネルギーを取り込んで、体内の不要物^{II}熱力学平衡を排出して自分の体を絶えず作り変えている。これによって熱力学平衡に陥ることから免れている。

皆さんも数年前と見た目はさほど変わらないかもしれないが、原子レベルで見れば、体をつくる炭素、水素、窒素、酸素など、ほとんどの原子は入れ替わってしまっている。生命は自分自身を作り変え、周囲の（^{II}）から物質やエネルギーを絶えず取り入れ、体内の不要物^{II}熱力学平衡を外に捨て続けなければならない。これによって生命は、熱力学平衡に陥ることから免れ、非平衡状態——すなわち「生きている状態」であり続けることができる。

であるならば、^B生命を育むことのできる惑星とはどんな惑星だといえようか。

もうわかりだろう。

生命の本質とはその機能にあり、そして、その機能を維持するために、生命は物質とエネルギーを周囲から取り入れ、同時に不要物を排出し続けなければならない。

言い換えれば、生命を育むことのできる惑星とは、すなわち物質とエネルギーを生命に継続的に供給できるしくみを備えた惑星だということになる。これは、生命がどんな物質で構成されていようと、また、地球であろうが、他の惑星であろうが成立する、宇宙における生命を育む惑星の普遍的な条件である。

物質とエネルギーを継続的に供給する惑星のしくみとは何か。何が起きていれば、物質やエネルギーを惑星は生命に供給できるのか。それは惑星上での（Ⅲ）に他ならない。

生命が利用できる物質やエネルギーは、そのほとんどが液体の水を媒体とし、地球で起きる水循環により生命のもとへと運ばれている。固体の b では流動性に乏しく、また気体の c では多くの物質を溶解することができない。物質を溶解し、かつ流動性の高い液体の d が循環することで、物質やエネルギーが生命へと運ばれる。一般的に、生命を育むためには惑星に水が必要だといわれる。だが、なぜ水が生命に必要なのか、その本質は何かと問われれば、それは水による循環が、物質とエネルギーを絶えず生命に運んでいるためだといえよう。これがあるお陰で、生命は熱力学平衡に陥らずに生命活動を維持できる。

（関根康人『生命の起源を問う 地球生命の始まり』講談社より 一部改変）

一 文章中の（ア）・（イ）・（ウ）のカタカナを漢字に直しなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

ア ヨギ イ マサツ ウ トげて

二 文章中の（Ⅰ）・（Ⅱ）・（Ⅲ）に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、それぞれ漢字二文字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

三 慣用句となるように、a に入る言葉を次の三つの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 覆水 イ 腹水 ウ 福水

四 b・c・dに入る言葉を文脈から自分で考えて、漢字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

五 A「熱力学平衡と呼ばれる安定な状態」とあるが、生物におけるその状態を一般には何と呼ぶか。文章中から抜き出して漢字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

六 B「生命を育むことのできる惑星」とはどんな惑星か。文章中から三〇字で抜き出して書きなさい。

問題は以上です。

